

WASEDA UNIVERSITY ALUMNI ASSOCIATION of JAPAN and TAIWAN

日台稲門会 会報 第15号



発行所：日台稲門会事務局
東京都大田区下丸子2-13-2-714(高橋方)
TEL090(6205)5454
編集委員会
発行人：岩永 康久
編集責任者：齋藤 晃

大震災後の良好な日台関係 内在する脆さ克服の途真直す主張を

会長 岩永 康久



我々台湾関係者には以下のような嬉しいニュースが流れた。即ち、日本政府による二〇一二年春の叙勲受章者が四月二十九日に発表され、台湾から過去最高の四人が受章した。今年の外国人受章者計四七人のうち、台湾の受章者数はアメリカに次いで二番目に多く、断交後初となる旭日重光章に二人が選ばれた。旭日重光章を受章するのは、中国信託ホールディングスの辜濂松会長(七八)と、エバーグリーングループの張榮發総裁(八四)。二人は台湾財界の重鎮で、交流協会台北事務所では、日本経済や観光産業への多大な貢献に加え、昨年東日本大震災への大規模支援などを推薦理由に挙げている。

一九七二年に日台が断交して以降、台湾からの叙勲受章者入りはなくなっていたが、二〇〇五年に復活。一度に四人の

受章は初めてで、旭日重光章は断交後の最高位となる。

加えて、台湾と沖縄の文化交流などに貢献した蔡雪泥さん(七六、女性)が旭日小綬章を、また交流協会の元現地職員が瑞宝双光章を受章する。

昨年の3、11東日本大震災以降、台湾からは二百億円にも及ぶ義捐金が寄せられた。これは全世界より寄せられた義捐金の中で最高額で、他を大きく引き離れた金額。人口二三〇〇万人(世界的に見て四七位)の民衆の浄財からの義捐金だった。これには多くの日本人が感激し、これまで台湾の存在を知らなかった人たちの間にも、日本の南に親日的な台湾があることに気づいた人が多かった。

九月には、台湾の支援に対する感謝を伝えようと、日本の若者六人が与那国島を出発し、百二十kmを五二時間かけて黒潮の海を泳ぎきり、宜蘭県の豆腐岬に到着した。海岸では台湾の学生や地元住民らが日台両国の国旗を振りながら、挑戦の成就を称えた。六人は岩手、宮城、福島三県の知事の感謝状を携え、馬英九総統へ届けられた。このニュースも台湾では大きく報じられ、友好のエール交換日台の絆を深める出来事だった。

経済的な出来事を挙げれば、日台の間で昨年十月に締結された「日台投資協定」があげられる。本件は日本交流協会と台湾側亜東関係協会の間で結ばれた民間投資取り決めの形を取っているが、実態は政府間協定であり、日台にとり初めての画期的な

協定であった。今後、関税協定(事実上の日台FTA)自由貿易協定の話などへ拡大させていくことも可能であろう。

日台FTA成立のために、二〇〇〇年以降民間側から積極的に取り組まれたのが、今回旭日重光章を受章された辜濂松氏。最近まで日本政府はFTA(自由貿易協定)に対する認識が甘く、積極的な取り組みをしなかった。それだけに日台の民間会議(東亜経済会議)でいくら議論しても具体的進展はなく、台湾側代表である辜濂松会長は何度となく辛い思いをされた。将来の日台経済協定に結びつけるため、「民間の絆を維持することが大事、いつか機が熟するまで」と長い間隠忍自重し、会議を継続されてきた。それがやっと状況変化(韓国と欧米とのFTA締結、最近の韓国の経済発展等世界的なFTAの動き)の中で、日本政府にもやっとな変化が生れ、今回の日台投資協定に繋がったと言っても過言ではない。

続いて昨年二〇一一年十一月、「日台オーストラリア協定」が調印された。これにより航空路線が自由化され、成田・羽田両空港以外で発着する路線について、航空客社が便数を自由に設定できるようになる。成田空港については、発着枠が二七万回に拡大する二〇一三年に規制を撤廃する。鹿児島、富山、静岡、石垣島、沖縄、札幌、帯広などの地方都市への新規航空開始が実現しつつある。

一方で残念なことが発生した。今年三月十一日、東日本大震災一周年追悼式において、羅坤燦・駐日文化代表處副代表が参列

されたが、外交官席ではなく二階の民間席に通され、名前を呼ばれての指名献花もできなかった、という事態が発生した。本件は国会でも取り上げられ、野田総理自ら「台湾からの多大な支援に対して我が国としては深く感謝しているところであり、同事務所への配慮が足りなかったと考える」旨のお詫ひの発言がなされた。

続いて今年四月十九日、東京・赤坂御苑で開かれた天皇、皇后両陛下主催の春の園遊会に、台湾の駐日大使に当たる馮寄台・台北駐日経済文化代表處代表が招待された。台湾の駐日代表が園遊会に招かれるのは初めてであり、天皇陛下は馮代表に対し、「台湾ありがごとく」と述べられた。東日本大震災の後寄せられた台湾からの多大な支援に対し、天皇陛下が直接謝意を示されたわけです。

そして本稿締め切り直前の四月の最後に出たのが、最初に述べた叙勲です。このように見てくると、日台関係は着実に双方の理解が深まり、良い方向に向かっていっていると思えます。しかし、追悼式での出来事のように、日本側に配慮を欠くような事態を生みかねない素地が残っており、それが台湾の方々を傷つける結果になりかねない脆さも秘めています。幸い今回は、日本側に日本政府の配慮を欠いた対応を追求する大きな声が上がらず、台湾に対する非礼があつてはいけないとの認識が政府・国会・世論の中に強まる結果となりました。

しかし、四月〜五月にかけ日台の代表(大使相当)が双方ともに交代となり、交

流協会理事長・亜東関係協会会長も交代となりました。日台の外交トップが全貫交代となったわけで、新体制がどこまで率直に話し合い、日台の相互理解を深めていけるか不安を感じる所です。台湾に深く拘わる日台稲門会としても日台に深く拘わることを認識し、草の根であつても、日台相互理解を深める一助となるべく、発信していかねばならないと感じている次第です。

以上
 (いわなが・やすひさ) 昭和四十四年政治経済学部経済学科卒業)

日台の信頼関係

幹事長 高橋 徹

このたび四月から小野間幹事長の後任を拝命しました、高橋徹です。自己紹介がてら、私と台湾との係りを信頼という観点から振り返ってみます。

一九八二年五月五日、三井物産台北支店の一番若い邦人職員として着任しました。この時代の台湾は戒厳令下にあり、一九七二年に日中国交回復とともに台湾との国交を断絶しており、日本製品もほとんど手に入らず、無論日本のテレビも入らず、貸ビデオ屋が町中にあり日本の番組を借りてきて見るくらいでした。引越越し荷物として、日本から醤油、ソース、マヨネーズなどを大量に持ち込んだことを覚えています。日本の新聞もその日の朝刊が夕方に配達されることが決まりましたが、しばしば遅く配達され、その時は、必ず紙面が

切られ、また記事が真っ黒に塗りつぶされておりました。中国関係または日台関係の記事が対象となっていたと想像しました。

前任者から厳しく申し渡されたことは、外で食事する時絶対に政治の話はしないこと、屋台は衛生上問題あるので店を構えたところで食事することの二点でした。しかし台湾のお年寄りは流ちょうな日本語を話し、親しくなった方からは日本時代には治安も良く、教育制度も整って今より良かったとの感想をたびたび聞きかされたものです。この頃、私は未だ台湾の歴史には疎く、一九七六年に初めて中国に出張し、その後何度か中国に出張した経験から、お役所と取引をしている感のある中国に対し、自由でフレンドリーな台湾はとても居心地の良い国に思えたものです。

しかし、表面と実態は異なっており、一度中国から台湾に香港経由で原料を輸入した際に通関でトラブル発生し、当時台湾で最も怖いと言われていた調査局が会社に来る事件が発生、同僚の台湾人がびりびりしており、危ない書類をどこかに隠すなどし、台湾のお役所には得体のしれない恐怖感を抱きました。

そんなスタートでしたが、しばらくして台北では太平洋圏で輸出、日本のスーパーも進出してきて、日本製品もどんどん手に入るようになり、台湾ビール一銘柄しか飲めなかったビールも欧米銘柄が先行し、やがて日本のビールも入るようになり大きく時代が動いて来たことを感じました。

祝 早稲田大学校友会日台稲門会
 会報第15号 発刊

中華民國 台北駐日經濟文化代表處
 代表 沈 斯 淳

東京都港区白金台5-20-2
 電話 03(3280)7811

一九八六年に戒厳令が解除されると、まさに自由化に拍車がかかりこの時期の台湾は大変な好景気で物資が不足し、日本からの輸入が拡大しました。また、日本のコスト競争から台湾・韓国に物作りを委託する商売の機会が増え、これを受ける台湾メーカーは従業員不足に陥り、台湾企業の中・ベトナム・タイへの進出がこの時期から始まります。台湾の老板を案内して中国・ベトナムに出張し候補地選びをお手伝いしました。これまでの経験から台湾の方は信用・信頼を大切にし、お世話したこと忘れず、必ず後の商売で返してくれると私流の解釈しておりましたが、正に後々、この時の台湾企業との信頼の交流が私の会社人生の基礎になることはこの時にはまだ分かりませんでした。

少し話がそれますが、私が着任後数か月して、三井物産の支店長が嶋沢さんに代わられ、支店内で二人ほけ邦人スタッフがおりましたが、早稲田大学出身は嶋沢さんと私の二人、嶋沢さんからの指令で台北稲門会を作ることになり、嶋沢さんが初代会長、私が事務局となった次第です。

さて、一九八八年秋に六年半駐在した台湾に別れを告げ、日本に帰国、再び一九九四年に北京支店に転勤となりました。北京には三年半おりましたが、中国で商売を伸ばすには、信頼できる台湾企業と組んで仕組みを作るのが私の中にあり、中国に進出した台湾企業との取引も多く、台湾企業の技術者を中国の日本との合弁企業に

派遣してもらおうなど台湾絡みの展開が好結果を生みました。

北京支店では商品統括として全中国の商品主管をしておりましたが、東レの前田社長から三井物産上島社長に東レ南通工場の商品を中国国内で内販してほしいとの依頼が来て、商品統括の私に社長指令が下されました。当時、各社とも中国での国内販売は課題ではありませんが、代金回収に大いに不安があり誰も本格的に手が付けられない状況下、東レに対してはここで恩を売りたいも代金が未回収で部門に迷惑はかけられないと二律背反の難しい問題に悩んだ結果、台湾の新光合織がこの商品を買えることを思いつきました。先ず台湾に飛び旧知の新光合織の副社長に直談判、担保も保証も取れない中、上海に邦人スタッフ一名を貼り付け商売がスタートしその後、新光合織が自社で原料を生産するまで代金未回収問題も起きず、無事内販が続けることが出来ました。この時、新光合織の副社長の支払は補償するとの一言で、かつて台湾に駐在した時経験した台湾人と日本人との信頼関係のみが支えて可能となったビジネスであったと思います。実際には本部から文書にて支払保証を取り付けるよう要求を受けましたし、それが常道であることは理解していますが、付き合いのある台湾人をどこまで信用するか大切である、裏を返せば、台湾人にとって自分のことを信頼してくれる日本人は裏切れない、と信ずることがKEY POINTであったような気がします。

その後日本に帰国、二〇〇二年に三井物産を早期定年扱い退職し、縁あって二〇〇三年十二月より日本の合弁企業である台湾の会社に四年間お世話になりました。この会社は、一時日本のパートナーから日本人技術者を派遣してもらった時期もありましたが、基本的には日本人は私一人。それまで、日本の会社に所属しながら外から台湾社会と接した経験はありませんが、台湾企業や周りは全て台湾人と、初めて台湾社会の内部に入っている四年間でした。先ず驚いたことは、一九八〇年代に駐在した時に頻繁に政治の話が出ることでした。ちょうど国民党と民進党のせめぎ合いが激しい時で、皆が政治評論家になったのではなにかと思えるほど、自由に活発な論議が行われていました。もう一つはお世話になった会社は台湾で上場企業であったため、日本と等しく近代化された会社法の下運営されており、他方で老板が筆頭株主であり、一族でかなりの株を占めていることから、いわゆる同族経営となっており、一族の老板の同族企業が複数ありそのことの取引が多い。また、燃料や原料も取引先との関係は一族並みに深いものがありました。

着任当初は、日本側株主からの依頼もあり、こうしたしがらみを整理し近代的経営に変えて行くことと試みましたが、周囲の同意を得ることはできず、その後は如何に台湾と日本の融合を図るかに視点を変え合弁が解消されるまで四年間お世話になりました。

ました。この時なぜ日本式の近代経営導入をあきらめたか、台湾人は人を信じたらとことん付き合う、日本であれば、売掛金の回収が遅れた場合、直ぐに対応処置を取って、場合によっては取引中止と債権回収を最優先に考えるも、台湾老板は、よほどの問題がない限り、取引は継続しつつ回収に努める。基本的には、オーナー企業とサラリーマン企業のトップの差である。台湾の企業にはオーナー企業が圧倒的に多いと理解しております。私のお世話になった企業は体質の古い企業で、全ての台湾企業がそうではないと思いますが、基本的には台湾企業は人と人との繋がりを大切にすることが生き続けていると判断します。日本企業は大きくなった会社ほど欧米型の経営手法が主流を占め、嘗て日本でも行われていた人情・信頼経営と別れを告げました。一方台湾では、今後、国際社会との関係が緊密になるにつれやはりこうした古い体質から脱し欧米型経営に向かつて行くのか、それとも人情・信頼経営を残しつつ第三の方向に向かつて行くのか大変興味あるところです。

最近投資促進政策のもと、台湾企業による日本企業への資本投資も行われ始めており、日本と台湾が相互の信頼関係に基づきビジネス面で依存度が深まることで、新しい日台関係が進展することを切望します。

(たかはし・とおる 昭四十八年商学部卒業)

「小生の台湾講座生を台湾研修に連れて行った際の李登輝元総統講話の原稿です。研修内容・写真等についてはP.7、8をご覧ください。(岩永)」

台湾経済の挑戦

李 登輝

西暦二〇〇〇年以来、台湾の経済発展は国内政治の不安定と二〇〇八年十月に突然起きた地球規模の景気後退の未曾有の困難と危機に襲われています。新政府の能力と判断、策略決定力量の不足は台湾の人民をますます五里霧中に陥れています。如何にして現在の困難を突破して新しい方向を探し出すかが、今、大衆の専らの関心事であります。そこで、私は今日、「苦境を打破し、未来を展望」と言う題目で、四つの問題と解決案を提起し、皆様と一緒に考えてみたいと思います。

- まず第一に世界金融のショックと、需要の大幅減退下に於ける台湾。
- 第二に台湾経済の挑戦と機会。
- 第三に失業と貧富差の拡大問題。
- 第四に産業構造の再調整です。

一. 世界金融のショックと需要の大幅減退下に於ける台湾

この度の地球規模での景気後退は、異例であるばかりでなく、注意を払わなければならぬ特徴が存在しています。

異例である点について言えば、以前は世界経済の一部が景気後退に見舞われて

も、他の地域は安全が保たれておりましたが、今回は、それが世界規模で起こっており、中国やインドの経済成長でさえこれを支えきれないでおります。

今回の景気後退は、突然発生したことが最も注目されます。二〇〇八年十月以降、特に、その半年間の急激な需要減退は、実に衝撃的で恐ろしい時期でした。今回の景気後退を予測し難いものにしたのは、企業と金融界は過去十年間、多くの面で、より開放的であり、透明性を増したものの、ヘッジファンドや投資銀行などによる間の銀行システムが保有する負債と債権が崩壊したことによって、突然大打撃を受けたのです。国際的金融統制を預かるIMFが、全くその機能を失い、欧米や日本政府が大掛かりで、前例を見ない施策をとって、一時的に状態が納まったように見えたのですが、今後も想定外のことが起こる可能性が存在しています。このような状態の下で、台湾はいかなる対策を採るべきかを検討しなければなりません。

(1) 台湾は対外依存度が高いため、欧米の景気後退による打撃に注意しなければなりません。

上述した様に欧米各国政府は前例を見ないほどの態勢で、金融危機を迅速に対処したとは言え、一部透明さを欠く金融界では、今後も想定外の出来事が起こる可能性も充分にあります。また、失業者の増加、金融システムの救済による納税者の大きな負担、公的負債の増加に対す

る社会的、政治的な反応が変化して、世界需要の更なる減退は必然的であると見られます。

台湾の中央銀行が今年一月に発表した「台湾経済情勢の回顧と展望」の報告によれば、二〇〇九年の経済成長率は二〇〇八年の0.3%からマイナス2.5%に減退しています。そのうち、第4四半期は-0.8%という未確定的な統計数字によって、全年でマイナス2.5%になっていますが、第1四半期から第3四半期だけの平均ではマイナス1.5%となっています。輸出入の激減が主で、国内需要は、これに次いで減少しています。

また新政府は、二〇〇九年十二月、及び二〇一〇年の台湾経済成長率を強く香港、中国に依存する政策をとっており、これにより、国内経済は暫時的に回復したとしても、経済発展の動態的能力は強くはなりません。輸出の促進は多方面の努力が必要であります。為替率の適正、インフレ傾向の促進、国内投資の努力など、非常に重要な措置があると思います。

(2) 海外、国内の金融規制が酷く落伍している。金融危機の根本は国際金融に端を発している。

闇の銀行システムが、欧米の金融機関の不正行動によって、多くの複雑なペーパーバティヴ関連商品を作り、不良債権に高利息をつけて、開発途上国の資金を吸い上げているのです。低利率を維持している台湾では、金融機関が大規模な「理専」と言う職員を使って、欧米の債権の売り

上げで収益を上げており、これら不正な金融操作にリスクが集まっている事実が、規制当局者、IMFや金融機関自身でも大規模に隠蔽されています。

台湾では、こう言っただけで済んだ金融政策に対して、極端に安価な信用供与を行ない、税制上の欠陥と金融機関のリスクな行為を調整せず、銀行の合併を促進する金融改革が行われてきたのです。

台湾は小型の開放経済に属し、大海を航行する小船のように、自主的な経済金融を保持することはありませんでした。

(3) 自由化と地球化は適切な規制が必要であり、放任主義であってはならない。

一般的に金融の自由化と貿易の自由化は経済的に有利であると多くの人が認めています。過度に経済有利であると認めるとは、資金、商品、人員の国家間の移動に於いて、難易の程度が異なることによるのです。目下、台湾経済における二大危機は、中国に対する過度の依頼とエネルギーへの過度の依頼です。政府はこれに対する有効な対策を持たず、逆に自由化を放任と曲解し、すべて関与すべきでないと考えています。その結果、政府は台湾商人の中国投資に対しては、ただ個別会社の要求に基づいて、その開放の声を聞いて、開放後に起こる社会的なマイナスの衝撃を考えていません。

金融グローバルライゼーションに対しても同じく、ただ放任と金融機関の合併を奨励するだけで、金融の監理、規約の修正などが重要であることを強調していま

せん。

若し、政府が依然としてこの様な簡易な自由市場を考慮して、商人を放任し、人民には開放後における社会的悪効果を負担せよと強調したら、人民の支持と承認を得ることは非常に難しいことになると思います。

(4) 施政目標は絶えず機会とリスクの間にバランスを求めべきである。

グローバル化に於いて、商品、資金及び技術の国家間移動が自由になり、政治障害が除かれた後、商品市場は、もはや政府地域の制限を受けず、各主要市場が、逐次単一市場に整合される可能性もあります。然し、グローバル化は、これによって、大多数の人間が自由に国家を選択することは出来ないでしょう。

大多数の国民の経済活動は、やはり国家の領土内で行われるものです。ですから、国際的に自由に移動出来る資源の所有者から言えば、グローバル化は一種の機会でしょう。しかし、その他の人民にとって、それはリスクと脅威でしかありません。政府の施政目標は、必ずこの両者を考慮し、バランスのとれた状態を維持すべきであると思います。

二、台湾経済の挑戦と機会

七〇年代のエネルギー危機が終了した後、欧州先進国は、国家経済の自主性が国全体の発展にとって重要であることに気づき、国家の生存と発展の経済優位性は、その国の所有する技術と資源の開発、管理と分配能力に依頼するものであるこ

とが明白になりました。

(一) 経済自主性を高めること。

上述した台湾経済の二大危機—即ち過度の中国依存と過度のエネルギー輸入は、経済自主性を軽視した結果によるものです。政府は必ずエネルギーの自給度を高め、内需産業の発展を促進することによって、将来におけるエネルギー不足の危機を避けると同時に、国際景気後退が台湾の経済に与える衝撃を避けなければなりません。

(二) 革新によって経済発展を促進すること。

台湾の人民は過去の経済発展過程に於いて、常に未来を展望し、国を超える技術移転と国際競争に対しては、絶えず各製品の革新に注意し、商業的機会と発展の潜在性を洞察し、機会を見失わず、新しい市場の開拓を行って、製品の競争能力を高めて来ました。

革新は台湾経済発展の原動力であり、企業家は革新によって利潤を獲得することが出来ます。全体的経済の発展は、これら企業家の、不断なる革新の創造的破壊過程と言えらるでしょう。革新によって、現在の技術と製品が取り替えられ、発展によって、ある程度成熟に達した産業が、若し革新されなければ、やがて斜陽産業として取り残されるでしょう。

市場の需要が増加することにより、初めて革新の機会が得られ、企業はそれに誘発され、研究開発に身を投じ、成熟し

た産業が新しい別の発展期に進進できるのです。経済体系内の如何なる産業も、発展期と成熟期が異なります。そのため、如何なる時期にも、ある産業は発展期にあり、ある産業は成熟期にあり、発展と成熟は交錯して存在し、革新は不断に起こり、経済の発展を促すのです。

(3) 中小企業の革新的努力によって、台湾経済は奇跡的な発展を遂げることが出来た。

過去における台湾経済発展の重要な要因は、中小企業の貢献が強く寄与しています。中小企業は機会を早く捕らえては、国際貿易を利用し、海外からの技術移転によって、国際社会に肯定される台湾経済奇跡をつくり上げました。六〇年代、政府は外国人の台湾への投資に有利な奨励を提供し、その上、高い素質の労働力を供給して、少なからざる先進国家の企業を誘致、または労働集約的な製品を購入入しました。これによって、台湾の企業は先進的な生産技術と管理技術を獲得し、又、多くの台湾の優秀人材が育ったのです。これらの技術を獲得した者は、後に自ら創業して外資企業の必要とする部品や外国商人の必要とする製品を生産し始めました。多くの中小企業は、一回目の注文を受注すると、国際市場に進出する機会を得、外国商人のOEM工場となりました。

台湾中小企業の供給する、品質の高い、廉価な製品や部品は、又、更に多くの外国商人を引きつけ、台湾に投資、工場設

置、そして製品の購入を行ったのです。

(4) 後進国に進出して、本国での過去の成功経験を生かすことは、悪性価格競争に陥るだけである。

台湾は、一九八〇年代の後期に至り、成熟期に達した一部の産業が、革新と研究発展を忘れ、又、国内の労働賃金上昇の影響を受けて、生産コストを下げる為に、東南アジアや中国に進出しました。この様な後進地域に進出して、台湾での成功経験を創ろうとした策略は、個別企業にとってリスクの最も少ない方法ではありませんでしたが、学習する方法がなく、模倣的競争の結果、最後は悪性の価格競争に陥り、なんらの利潤を得ることが出来ず、止むなく閉鎖、或いは移動せざるを得ない状態になりました。

私は台湾の中小企業経営者が、過去のように精神を打ち込んで、製品の品質を引き上げ、新しい挑戦に相対して、更に発展過程における革新の重要性に注意すべきであると思います。

(5) 政府は中小企業の革新と転換に協力すべきである。

台湾経済の将来が継続的に発展するか否かは、一に上述の革新的能力の継続的発揮如何にかかっています。現在の政府は、台湾に留まって転換したい、或は革新したい中小企業の投資やコストの引き下げに十分な協力を与えていません。又、補充的外国労働者の申請や環境法規の執行も厳格且つ煩雑であり、これら皆、中小企業の核心的意志に打撃を与えてい

ます。中小企業が獲得する生産値は、大企業に比べて決して大きくはありません。但し、中小企業は社会の雇用機会を創出し、又、維持する最も重要な柱でとなっております。政府が若し中小企業が存在を無視したとなると、社会の失業率はますます高くなることを忘れてはならないと私は思います。

三、失業問題を解決し、貧富の格差を縮小すること

失業と貧富の差の拡大は、目下、台湾の中産階級以下の人民の大きな苦痛の種類となっております。

(1) 中下層の所得が継続的にマイナス成長にあることは、階級対立を刺激し、同時に民主制度に衝撃を与えるものである。

過去七年間、台湾の平均GDPは4%を超えて成長して来ましたが、未だ大多数の家庭の所有になっていません。最低所得の20%の家庭で、その支配できる収入は、平均マイナス0.5%という状態で成長し、次の低所得20%の家庭の収入は、年平均マイナス0.16%程度で、共に殆ど増加しておりません。台湾の多くの家庭は、将来における雇用機会と所得収入の成長に強い不安を抱えています。新しい雇用機会が増加せず、又、現在の雇用機会が大量に流失しているのをみて、自己の前途に深い憂いを持ち始めているのです。所得収入が増加出来ない状況は、少なからざる家庭の経済地位の持続的悪化を来し、十分に経済発展の成果を享受

出来ないことで、大多数の人民はグローバル化に対して、かなりの疑問を抱いています。

政府が若し即刻、このような家庭経済地位の持続的悪化を解決出来ないならば、他国の経験をみても分かる様に、これら中下層の人民は、階級の対立や現有政治体制の転覆に奮闘することになるでしょう。これらの人民は、民主制度が彼等に公平正義、或は機会均等を与えられないならば、民主制度に対してさえ、自信喪失という結果を生み出すかも知れません。

(2) 兩岸の経済貿易に対し、有効な管理が出来ない上での大量資金の海外投資は、国内投資に強く影響を及ぼす。

失業と実質所得の停滞が継続的に悪化した原因は、多くの台湾企業が、過度にコスト引き下げに気をとられ、産業の海外移転戦略を強調して、革新の重要性を忘れた事にも拠りますが、過去八年間、民進党政府が、兩岸の経済貿易の管理を怠った責任は問われるべきことではありません。その結果、台湾企業が行った中国投資は、台湾のGDPにおける比率が一九九九年の0.5%から、二〇〇七年には一挙に上昇して2.0%に達しています。新政府成立後もまた、積極的に問題を解決せず、企業への中国進出を放任し、二〇〇九年第三四半期、株式市場に上場している会社の中国への移転金額は、五百二十億元に達し、上半期の移転金額を超える状態にあります。資金の持続的外への移行の結果、国内投資の投資率はほとんど

ど上がらず、雇用機会の海外移出が多く、新しい雇用機会も国内投資の減少で伸び悩み、先進諸国への投資も不足の為、所得収入は自然増加出来ず、将来の家庭所得の格差は拡大するばかりです。

(3) 家庭の所得収入の増加を促進することが、財政政策の主要な任務である。

目下、台湾の経済問題は、経済が成長しないことではなく、近年來、家庭の所得収入が減退状態にあることがその理由となっております。新政府は、如何にしてGDP成長を多くの家庭の所得収入の増に転化するかを財政政策の緊急目標とすべきです。家庭所得収入の成長が経済成長と同一歩調で進まないことは、世界的な普遍現象ではありますが、台湾と中国の経済関係が過度に密接になった為、この様な現象が特に深刻化しているのです。

四、台湾の産業構造を調整すべきである。

グローバル経済の迅速な発展に伴い、世界の気候も顕著な変化を示して来ています。最大の要因は人為的な温室効果による気体の過度排出です。国際エネルギー機関、IEAの統計によれば、一九九〇年から二〇〇三年の間に、世界各国から排出された二酸化炭素の増加量は、台湾が第八位にランキングしています。但し、二酸化炭素排出の年増加率では、台湾は世界のトップに挙げられています。二〇〇五年の別の統計によれば、台湾のエネルギー高消費産業(例えば鋼鉄、石油化学、製紙及びセメント工業)が、三

分の一以上のエネルギーを使用していて、GDPの産出量は三分の一にも満たない状態にあります。これは明らかに、台湾の産業構造を調整しなければ、世界の気候の変化に対応出来ない事情を招くこととなります。

(1) 新しい雇用機会を創出し、一途に雇用機会の増加を追求する政策に変えるべきである。

ドイツ政府は二〇〇七年、既に全世界の気候の変化に対応する第三次工業革命を定め、産業構造の調整を通して、エネルギー消費の減少に努め、再生エネルギーの発展を進めて、二酸化炭素の排出量を減少する政策を採用しております。ドイツは更に経済発展の目標を成長率の追求から雇用機会の創出に改めました。

(2) 気候変化に応じたエネルギー産業の発展によって、永続的経済発展に邁進すべきである。

台湾は、正に先進国家の系列に入る時機にある為、エネルギー産業を確立すべき挑戦を避けては通れません。新政府はこの機会を借りて、産業構造の調整を行い、エネルギーの消費を減らし、再生及びエネルギー代替品を開発して、より多くの雇用機会をつくり、エネルギーの海外依存を減らすべきであると思います。先進国家の成功事例を引用して、生産面からエネルギーの消費を減らし、二酸化炭素排出を避ける事は、台湾をして「永続的発展」を重視する国家に成長させるに違いありません。



李元総統の講話及び討論会



李登輝・元総統 (右) と



頼清徳・台南市長 (右) と



李嘉進・総統府資詢委員 (中央) と



台湾大学学生との討論会・懇親会

岩永台湾講座生台湾研修 二〇一二年三月

今回の研修旅行は小生が早稲田で講座を始めてから早や四回目になります。三月四〜八日のスケジュールにて、十三名の学生を連れて行ってきました。又今回は初めての試みとして、八田與一の烏山頭ダムを訪れ、賴清徳市長との面談等台南市政府にも大変お世話になりました。今年の学生は講義で学んできた事と台湾の現実の姿を自分の目で確かめながら、更に突っ込んで日台関係を知りたいとの意気込みが感じられました。仲間内で夜中まで話し込んでいるにも拘らず昼間は居眠りもせず熱心に話を聞き、質疑応答にも積極的に発言していました。面談いただいた方々にお礼状を送りましたが、学生からの積極的な質問に満足しておられました。研修ではいろいろな角度から台湾の政治・経済が見られるように、また台湾の若者の意見も聞けるように台湾大學学生との討論会・懇親会も手配しました。スケジュールは以下通りでしたが、訪問・面談においてはそれぞれ貴重な話が多く、個別に詳細を記載したい所ですが、紙面上の制約があり、トピックスのみ後述する事とし、添付写真(7頁)・以下スケジュールより類推下さい。

台湾研修スケジュール

2012/3/4(日) 13:30 成田空港第2ターミナル南ウイング団体カウ

ンター6〜18番前 15:30 成田発
CX451 台北桃園 18:35

5日(月) 8:30 ホテル発 市内観光

故宮博物院・忠烈祠・101・龍山寺・

中正記念堂 昼食・鼎泰豊 夕食

18:30 国賓H 三三会 郭盛淇秘書

長・亞東關係協会 顏平和副秘書長

6日(火) 8:30 ホテル発 9:00〜

10:00 總統府 10:00〜11:00 總統

府(李嘉進国家安全會議諮詢委員)

11:00〜12:30 二二八記念館(蕭錦文

氏案内) 14:00〜15:30 亞東關係協

会彭榮次前会長(福華飯店4F)

16:00〜 台湾大學討論会 夕食 台

湾大學親睦会

7日(水) 8:30 ホテル発 9:00〜10:

30 ソニー台湾(荒牧社長) 11:00

〜昼食14:00 自由時報(吳阿明会長)

15:00〜17:30 李登輝元總統 夕食

19:00 台北稲門会(種慶川菜)

8日(木) 7:15 ホテル発 8:00 台

北発 高鐵 嘉義 9:34 烏山頭ダム

(八田與一) 台南科学園區(住華科

技) 16:00〜17:00 賴清徳台南市長

20:15 台南発 台北着 22:00

9日(金) 台北桃園12:45 CX450 成

田 17:00 帰国

李元總統は過去三回の岩永塾生(生徒がつけた俗称)の訪問が気に入られ、いつでもどうぞとの事でしたが、昨年末に大腸がん入院され、公務から遠ざかっておられた為、アポイント確認が遅れ、旧正月明けの二月になってからの確認となりました。健康状態が心配されました

が、「台湾経済の挑戦」と言う演題(4頁に全文掲載)で熱のこもった講演をいただきました。その後質疑応答になり、学生からいろいろな質問が出るにつれ、益々熱がこもり、秘書が止めるのを制止して、二時間半に及び講演をいただきました。別れ際に「岩永塾生との面談は楽しい」とのお言葉をいただきました。学生達も偉大な政治家の話に強い感銘を受けた様子でした。前述通り、今回は新しく「八田與一の烏山頭ダム」訪問を組入れましたが、台南市政府がすべての手配をやってくれ、賴清徳市長(民進黨の次のリーダー候補)との面談も設定されました。台湾を愛する想いは強く、はっきりとした意見の表明は印象的でした。また八田與一の記念館が作られ、それは彼の功績を事実に基づき再現したもので、そこで台湾の小中学生が課外授業を受けている姿は、日台の相互理解に大きく資するとの想いで、感慨深いものでした。もうひとつ、總統府国家安全局の李嘉進資詢委員(大臣相当)との面談も事前設定し、總統府(總督府)の歴史を学び、講演討論会では日本との関係の重要性、若者交流の重要性が強調されました。

食の面では、三三会(日本の経団連に相当)招待の夕食会(国賓大飯店VIPルームでのご馳走に学生は驚き、台北稲門会招待の夕食会では諸先輩と一緒に打ち解けて盛り上がりました(詳細は台北稲門会HP <http://www.waseda.or.jp/>で参照ください)。一方、亞東關係協会彭榮次前会長は夜更かしの学生が眠くなら

ないように「茶話会」形式にしようとの配慮をいただき、福華大飯店にある彭會長専用とでもいふべき茶話室にて、客観的かつ非常に深みのある内容の話をいただきました。二二八記念館を案内してくれた蕭錦文氏は酒井充子監督の「台湾人生」にも登場されている方で、実体験に基づき真に迫る話を聞かせていただきました。自由時報新聞社訪問では吳阿明会長が昼食を交え長時間質疑応答に対応いただき、高年齢にも拘わらず、台湾を愛する気持ちと、日本統治時代を肯定的に振り返り、日本人はもつと自信と誇りを持って良いと強調されました。台南科学園區にある住華科技(住友化学のフィルム生産工場)訪問では台湾産業のダイナミックな活動とその中で頑張っている日系企業の活動を目の当たりにし、台湾経済の先進性と日本との繋がり、台湾を認識出来たようです。企業訪問としてはソニー台湾も台北にて訪問しましたが、ソニーの台湾からの仕入れがソニー全体の80%に及ぶ事を知り、経済面での日台の繋がり、深さも再認識された所です。

最後に、学生のなかには日本の戦後教育の中で加害者意識を持ち続けていた者もあり、いろいろ考える事が多かったようです。比較的高齢な方ばかりでなく、台湾大學学生との討論会・夕食会を通じて若者も非常に親日的で、中・韓の歴史批判とは違つ、客観的事実に基づく台湾の肯定的歴史観がある事を自分の目で確かめる事ができたようです。

(日台稲門会会長・岩永記)

WTSAとの懇親会報告

幹事長 高橋 徹

今年度日台稲門会の活動方針の一つとして、台湾からの留学生との交流を掲げました。

キックオフとして、五月九日(水)午後六時より大隈会館・楠亭にて初回の懇親会を開催いたしました。WTSA (WASEDA TAIWANESE STUDENT ASSOCIATION) 早稲田大学台湾同学会)より王俊硯会長始め幹部一〇名、日台稲門会よりは岩永会長始め参加可能な幹事一〇名が参加

台湾・中国に留学経験のある大学院生平井氏が加わり、日台稲門会よりの参加者は実費負担、WTSAの留学生は招待ということとで和やかな雰囲気が始まりました。岩永会長は早稲田大学で講座を持って教えられると、一部の留学生とも顔見知り、また、幹事である江正殷先生は台湾へ出身で大学でも教えられるのので無論、留学生とも顔見知りでしたが、他の幹事は留学生とは全くの初対面です。のようにスタートさせたら、懇親会が盛り上がりつつあるか、若干心配していましたが、留学生側の自己紹介から始まり、台湾大好き人間の集まりである日台稲門会の台湾との駐在経験や係りを紹介し、一気に距離が近くなりました。

あちらこちらで、話の輪が出来、色々な話題で盛りあがっていました。私の周辺の話題のみ抜粋してご報告します。先ず留学生と言っても色々な目的をもって早稲田に留学してきており、四年生になり既に日本の大手企業に就職を決めておられる方、将来は台湾に戻り、政治家を目指す方、交換留学生として来られている方が様々でした。

日台稲門会幹事に先の東京マラソンで謝辞台湾とゼッケンに付けフルマラソンを完走された方がおりましたが、WTSAにも同じ東京マラソンを完走された方がおり大きな目標を達成した者が共有する親近感が生まれたのではないかと思います。また、五月の連休にヒッチハイクで三日間、西に向かって旅し三日目には鹿児島まで行き着き、帰りは観光しながら四日かけて戻ってきた、等々日本の学生より日本に入り込み本当の日本を実感できたのではないかと感心させられました。

日本に一年以上留学している方は日本語も堪能ですが、昨年九月に来日された方は、日本語はおぼつかないようでした。が、幹事の皆さんは昔を思い出して、台湾なまりの中国語、英語を駆使し(時には台湾語)、言語の壁など全く感じさせずお酒の勢いも借りてアツという間の二時間半でした。

今回の懇親会を通して、台湾からの留学生は本場にビュアーで、台湾を愛し、日本を好んでいる印象を受けました。日台稲門会としてもこれを機会に台湾からの留学生に何が出来るのか検討していきたいと考えます。既にこの懇親会終了後に一部幹事から就職希望の留学生の相談に乗ってあげても良いのでは、との声を上がり始めました。今後幅広く台湾からの留学生の役に立てることが、日台稲門会の一つの重要な課題として考えます。

次は、6月9日の総会・講演会・交流の集いにWTSAより多数参加の意思を伺っておりますので、会員・会友の方々も台湾よりの留学生との交流に関しご協力をお願いします。

以上

「謝辞！台湾」を背に

萩原 伸一

二月二十六日の東京マラソンを走りました。

還暦を過ぎ、仕事も第二の人生に向けて軟着陸体制に入ったので、今までの会社中心(?)でストレス発散はアルコールという不摂生な生活からリセットを図るキッカケにと一年前からジョギングを始めました。五キロ、一〇キロと距離を伸ばしていく内にどうせ走るならフルマラソンを走りたいという思いが募り、東京マラソンに参加申し込みをしたのですが、一〇倍の競争率で落選。諦めていたところ妻が独断で「何時まで元気でいられるかわからないのだから、走れる内に」とチャリティー枠(一定額以上の寄付)で申し込んでくれたお蔭で走れることになりました。妻に感謝!

次は、五〇年近く生活をした東京の街を走りたいという思いが募り、東京マラソンに参加申し込みをしたのですが、一〇倍の競争率で落選。諦めていたところ妻が独断で「何時まで元気でいられるかわからないのだから、走れる内に」とチャリティー枠(一定額以上の寄付)で申し込んでくれたお蔭で走れることになりました。妻に感謝!

チャリティーランナーとして、背中のゼッケン「I'm running for...」にメッセージを書くことを求められたので考えた末「謝辞台湾」と記入しました。昨年、東日本大震災に際して、二百億円もの義捐金をお送りいただいたことへの感謝。そして、私の四年間の台北駐在生活において、台湾の合併先企業や現地社員、お取引先企業など大勢の方に大変お世話になり迷惑(様々なことがありましたが)も掛けたことへの感謝を込めたメ

ッページです。加えて、日本人に対しても、台湾のことをもっと知り、理解してもらいたいという願いも込めました。

二十六日当日は曇天、風もあまりなく絶好のマラソン日和でした。見慣れた街並みも埋め尽くした観衆を見ながら走るとまた格別。沿道での各種イベントや派手なコスプレのランナーなどマラソン大会と言ふより東京祭りといった雰囲気です。台湾からの参加者も一〇〇人程はいたのではないのでしょうか。背中のゼッケン「謝辞台湾」を見て何人の方が「ありがとう!」「謝辞!」「加油!加油!」と声を掛けてくれました。台湾のランナーに元気をもらいながら、初めて四時間台でゴール。多少は日台友好にもなったかなと勝手(?)に思っています。

東京を走り、後は、生まれ故郷の千葉県、七年間駐在したシンガポール、小学校時代二年間生活したハワイ、そしてお世話になった台北を元気な内に走りたいと思っています。其々の地に感謝を込めて。台北を走る時のゼッケンは「加油!日台」かな... (はぎわら・しんいち 昭和三十八年第一法学部卒業)



日本の将来

岡嶋 久彌

今年二月、東日本大震災一周年と云うこともあり、早稲田大学のゼミ仲間三人(政経・山岡ゼミ、S四四年卒)で気仙沼、仙台空港、名取市閑上地区を見学してきました。映像や記事情報ではなく、この目で現場を見たうえで、微力ながらも日本の将来について考えて見ようと思つたからです。二〇〇九年九月民主党への政権交代があり、その一年後尖閣諸島事件、二〇一一年三月に大震災が起りました。ここ数年、バブル崩壊後のデフレ不況が続く中、経済問題に心が集中していた中、突然に政治体制、防衛・外交、エネルギー・災害対策と言つた我国の基幹にかかわる問題が突き付けられました。豊かさの中で、更なる効率主義を求め、リスク対策を怠つてきたといふことでしようか。それにしても、立場でしか発言しない人が増え、心ない、冷たい社会になつていたのでないでしょうか。かかる中で南三陸の女子職員の身を挺しての津波避難の呼びかけ、台湾の方々からの多額の寄付等の熱い思いを知る事ができました。話が饒舌で何を言っているのか良く分らない政治家が多い中、石巻工業高校キャプテンの選手宣誓の爽やかさも異彩を放っています。この言葉の中には今後の日本を考える上でのヒントが詰まっています。難しいと思つていた原子力の問題も専門家へ丸投げするのではなく、自ら学ばねばと思

うようになりした。我々は今回の震災を機に多くの事を学び、この国の将来を真剣に考えるようになりました。私は日台稲門会への入会を機に、アジアの歴史に大いに興味を持ち、台湾の歴史から父母が余り語りたがらなかった太平洋戦中の事、公私にケジメがあり献身的な日本人の事を学びました。台湾の愛日家・親日家の書物には日本の将来を考える上での多くの提言も散りばめられています。これからは「私より公」、「物質より精神」、「経済より政治」を重視せねばと考える今日この頃です。(おかしま・ひさや||昭和四十四年政治経済学部経済学科卒業)



台湾の皆さん、

震災支援ありがとうございます

下中 幸雄

一九九六年三月、李登輝氏が中華民国総統に再選されたが、この選挙は総統を住民が選ぶ初めての直接民選選挙であった。台湾の独立に反発する中国はミサイル演習を台湾近海で行い、これに対しアメリカ第七艦隊が空母を台湾海峡に派遣するなど、兩岸関係が一気に緊張した。その最中、私は台北に赴任、平和ボケ日本では想像もしなかった緊張感を味わった。四年後の総統選を見届け帰国したが、今年一月に行われた総統選をテレビで見ても、七十五%と言つ高い投票率も

さることながら、台湾の人びとの選挙に対する熱気を再認識した次第である。今日の日本、一票を投じた政治家が見当たらないと言つ不幸はあるものの、国の将来を考えた積極的に関わっていく術はないものかと考える毎日である。

東日本大震災に対する台湾の支援に謝意を伝えるため、台南市で桜の植樹祭に参加した森元総理が「台湾の人々の震災支援に心から感謝する。桜が日台の絆をますます強くしてくれるよう願っています」と挨拶されたとのニュースを見た。二〇〇億円を超す世界最大の義捐金をはじめ、多くの台湾の人々の支援に対し、感謝の表し方も知らない、礼儀をわきまえない政府の対応に強い憤りを感じていたが、多少は胸のつかえが下りた気持ちになった。

烏山頭ダム、八田與一記念館を昨年訪れたが、見事に整備されており、台湾の方の師に対する思いが良く表れていると感した。師の銅像は思慮深い、使命感に溢れた師の人物像が覗える、今も印象に残る表情であった。価値の高い文献も数多く展示されており一見に値する。ダムを背景にした景色も素晴らしい。

今、神戸に住いし台湾三田会OBの濱野素邦氏、大場知之氏とラウンドする機会があるが、台湾早慶戦は相手側の連勝続きとか・・・、在台時三年間負けなしということもあつただけに忸怩たる思いである。(しもなか・ゆきお||昭和五十一年商学部卒業)

日本と台湾の懸け橋を目指す

石川台湾問題研究所

代表 石川 公弘 (昭和34年商研卒)

〒242-0029 大和市上草柳6-12-13

Tel 046-261-1838 Fax 046-208-2012

Yahoo! ブログ - 台湾春秋 発信中

<http://blogs.yahoo.co.jp/kim123hiro/MYBLOG/yblog.html>

日本李登輝友の会神奈川県支部長

高座日台交流の会事務局局長

早大日台稲門会顧問

台湾人の動物的勤

小林 重雄

昨年の東日本大震災には心が痛んだが、反面思わぬ出来事も生じた。台湾から世界一巨額の義捐金が寄せられ日本で改めて信頼出来る友邦としての台湾を見直す動きが出たのである。台湾に謝意を表するため沖繩の与那国島から基隆迄リレー遠泳をしたり台湾各地で音楽会を開いたりする日本の若者が現れた。そして何より嬉しい現象は今年に入り日本企業の台湾への投資が急増していることである。

こんな動きを見て私はある思いに捕らわれた。「戦後の台湾人は何故反日にならなかつたのだろうか」という逆説的な感懐である。一九七〇年代、私は台湾の大学にいたが、教育界で行われている反日教育、テレビで流されている反日ドラマなどを目の当たりにして市井で付き合う台湾人の思いとは随分違うのではないかという違和感を覚えた。国民党独裁の時代で中国から来た一握りの外省人がこんな政策を進めていた。大学の授業中でも「戦前の台湾の治安が良かったのは日本統治下、残酷な刑罰で台湾人は怖くて悪いことが出来なかつたからだ」という幼稚な説明をする教師がいた。しかし長い時間と莫大な金を掛けて推進した反日教育は台湾人の間に根付かなかつたと言わざるを得ない。上述の台湾から日本への巨額の義捐金を見れば一目瞭然である。

こんな事象に触れて「戦前の日本の統

治が良かったからだ」と言う日本人もいる。だが重点は別の所にあると思う。歴史上台湾人は多くの外来為政者の実像を見て来た、そして頼りになる組織、人とはどんなものかという動物的な勤を体得したのである。組織の中で働く人なら誰でも体験したことがあるが、頼れる上司や同僚とは有事には動き責任の取れる人であり、断じて長々とお説教する人ではない。極論すればお説教に意味はない、行動こそすべてである。お説教してみた教育は根付かないのである。人間のあり方、男のあり方として見ても台湾の歴史に学ぶことが多い。(こぼやし・しげお||昭和四十二年商学部卒業)

台湾との出会い

山崎 総

昨年、すばらしいご縁をいただき入会いたしました。一九八五年、早稲田大学第一文学部ドイツ文学科卒の山崎総でございます。在学中は、雄弁会活動で、石原慎太郎事務所にて書生や、新自由クラブの選挙のお手伝いなどの政治の真似ごとをしておりました。また、植林同好会、青嵐舎にて、四国の山にて植林活動で汗を流しておりました。さて、私と台湾のかかわりでございますが、その青嵐舎活動で、早稲田大学緑の訪中団として、北京大学、復旦大学など、中国各地に日本の杉を植林しながら日中交流活動をしておりました。その帰り道に、私は、台湾

との交流の必要性も考え、台北、台中、台南、(別添、当時の写真)の単独交流をしたのが、台湾との最初の出会いでございます。写真のように、早稲田の角帽と学ランという奇異ないでたちにもかかわらず、台湾の皆様は各地で熱烈歓迎してくれたことが忘れられません。

そして、現在、共同ピアーという会社で、台湾での日本や日本企業のPRを、日本においては、台湾のPRを、いつかは、台湾とビジネスをしたいという早大時代の思いが、やっとかなえられる時がまいります。

台湾とのビジネスは、これからですが、稲門会の諸先輩の御指導いただき、日台のかけ橋になるべく、精進いたす所存でございますので、今後ともよろしくお願いたします。

また、このようなご縁をいただいた、渡邊義典先輩、アセアン倶楽部、浅田定宗社長、亜細亜友の会、元衆議院の半田善三先輩には、この場をおかりして心から御礼申し上げます。(やまぎき・さとし||昭和六〇年第一文学部独文科卒業)



慶祝 日台稲門会第15号会報発刊

集集電工業股份有限公司

簡 燦 雲

(昭和20年 理工学部電気卒)

火泥熔接®

Volcanit Weld®

EXOWELD

鋁熱熔接器材

接地工程器材

避雷針設施

專業製造銷售

台北市師大路93巷18號1樓

公司：電話(02)2364-2200 傳真：(02)2366-1930

工廠：電話(02)2637-1906 傳真：(02)2637-1907

統一編號：09411969

台湾に想う

小椋 和平

「十五年と十五日」、一九九五年三月二〇日に台北桃園空港に降り立ってから、会社生活の半分近くを過ごした台湾は正に私の第二の故郷です。早稲田にも高等学院から大学院迄九年間お世話になったことを想うと、私は、どうも一ヶ所に長く安住したい性格のようです。

台湾では、その間に総統の直接選挙や政権交代による民主化の進展、九二一大地震やSARSの蔓延、台湾新幹線や台北101の竣工、中国との直行便の就航や経済関係の緊密化等大きな環境変化が起こりましたが、台湾の人々の明るさと元氣、そして街を覆う臭豆腐の匂いは一貫して変わることはありませんでした。

私自身も世界最大のガス焼き発電所の受注や台湾新幹線受注への関与等仕事にも恵まれ、二〇〇六年には日本人会会長として初の大相撲台湾巡業を受入れ、二〇〇九年の工商会理事長時には初めて台湾政府に台北市日本工商会の「白書」を提出する等、多くの貴重な思い出を作る事が出来ました。

そんな中でも、私の記憶に強く残っているのが台湾の知的障害者の皆さんとの交流でした。

最初は、会社の社会貢献活動の一環として台北市社会局の紹介で陽明教養院という重度知的障害者の施設を訪れたのですが、院生達の純心無垢な眼差しに打たれ、その後帰任までの五年間、多くの交流の場を持つことが出来ました。

歌手の青筋さんや台湾人歌手の皆さんの協力の下で開催した三菱グループチャリティーコンサートの収益金の寄付や院生の招待、商事社員と院生の定期的な相互訪問や交流会、日本の和太鼓グループの教養院での演奏会等々。

そんな交流や活動を通して何時の間にか大きな信頼関係が芽生え、自らも相手に目線を合わせる事の大切さ、日常の自分の置かれている環境への感謝の気持ち、そして活動した皆と分かち合った一体感といった多くのことを学ぶことも出来ました。

そして、帰国に際しては院を挙げての歓送会を開いて貰い、それが台湾の経済史「商業週報」に特集されましたが、「爸爸」と呼んでくれるようになった院生達との別れは胸にこみ上げるものがありました。

今後も個人として、日台稲門会の一員として、お世話になった台湾への恩返しに繋がる活動を行き度いと思っています。(おぐら・かずひら||昭和五十二年理工学部機械・昭和五十四大学院理工卒業・三菱商事)

春の叙勲、台湾から一気に4人受章

日本政府による4月29日付発表の2012年春の叙勲受章者の外国人叙勲計47人のうち、台湾からは次の方々4人が受章されました。

- 辜 濂松さん(78) 中国信託ホールディングス 会長、台日商務交流協進会理事長 旭日重光章
- 張 榮發さん(84) 長榮(エバーグリーン) 集団総裁 旭日重光章
- 蔡 雪泥さん(76) 女性中琉文化経済協会理事長 旭日小綬章
- 蒲 武雄さん(68) 交流協会台北事務所元現地職員 瑞宝双光章



■社工間陽明教養院院生最想去哪個國家、大家同聲說：「日本！」



日本語教育と進学指導の JET

- 大学院進学コース ●大学進学コース
- 日本語コース ●短期コース

学校法人 JET 日本語学校

理事長 金 美齡 (昭和46年文研博士単位終了 元早大講師)
校長 井上靖夫 (昭和60年一文卒 早大学院講師)

東京都北区滝野川7-8-9 TEL.03-3916-2101

Email: info@jet.ac.jp Homepage: <http://jet.ac.jp/>

台湾への憧憬

浅井 利明

高等学院出身で自他共に認める早稲田大好き人間である私は、各種稲門会のお誘いがあれば必ず入会しており、本業である不動産鑑定士稲門会のほか、不動産稲門会・行政書士稲門会という職域稲門会、昭和五十九年の年次稲門会、幹事長を務めている地元の松戸稲門会、さらに日台稲門会と合計六つの稲門会でお世話になっております。

日台稲門会は行政書士稲門会の大嶋武先生にご紹介いただきましたが、駐台の経験どころか台湾を訪れたこともない私に執筆資格があるのだろうかと思いつつも、台湾への思いを綴らせていただきます。

李登輝氏に代表されるように、「日本人以上に日本人らしい」「古き良き日本が残っている」といわれる台湾に、私は憧れを抱いております。

東日本大震災で台湾から受けた官民挙げての被災地支援は他国を圧倒し、いわゆる日本語世代のみならず台湾の各世代が親日の気持ちを見せてくれました。しかし、現民主党政権は一周年追悼式において、中国に阿るあまり台湾代表を一般扱いするという無礼を働きました。到底、許されることではありませんが、台湾の対応は冷静でした。その後、春の園遊会において、天皇陛下が初めて代表として招待された台湾代表に対して感謝のお言葉を述べられました。前述の無礼がなくても、陛下は当

初からそのようなお気持ちを持たれていただくこと拝察致しますが、現政権の非礼を陛下が後始末されたような形となってしまいました。日教組や自民党に支えられた民主党政権を一刻も早く滅ぼさなければ、日本が減んでしまいます。

「台湾で最も愛される日本人」といわれる八田與一や、根本博元陸軍中将(国共内戦末期に金門島において中共軍を壊滅させ、現在に至る台湾の独立保持に貢献)など、台湾を愛した日本人は枚挙に暇がありません。このような個人の親愛が日台関係の基礎になっているものと思えますし、今のような親日「国家」でありつつけてほしいと願ってやみません。良い温泉もあると聞きますし、いつかは家族で訪台したいと望んでおります。(あさい・としあき 昭和五十九年政治経済学部経済学科卒業 (有)投資評価 不動産鑑定士)



鳴子温泉・早稲田棧敷湯にて

台湾茶に魅せられて

逸見 政幸

私と台湾の関係は、台湾に駐在していたわけでもなく、台湾の方が東京で台湾料理の商売を営まれているとその税務申告を私が行っていたのが台湾との繋がりです。

猫空(マオコン)。台北から車で四十分ぐらいの山の丘陵地帯にあり茶芸館が何十軒と建ち並んでいます。日本語読みすれば「ねこぞら」ロマンチックなネーミングに惹かれるが猫がいつばいるわけではありません。名前の由来は溪谷の岩肌が水の流れによって削られ、その岩肌が猫の爪に引っかかれた穴のように見えることから、「猫の洞窟」とよばれました。ここはお茶好きにとっては是非行きたいところ。木柵鉄観音茶の名産地です。

お茶の中でもいろいろな種類があり、台湾茶は基本的には青茶が多くを占め、青茶は包種茶と烏龍茶に分かれ、木柵鉄観音茶は包種茶に含まれます。台湾から海をへだてた隣の中国福建省が青茶発祥の地であり、福建省から移住してきた人が多いためとのこと。

山野の斜面には茶畑が広がり茶芸館のオープンテラスで風を感じながら台湾茶を飲むと街中では味わえない気分が得られます。山の湧き水で飲む茶の味はまろやかです。

それと夜人気なのは夜景。私は夜行ったことはありませんが、台北市内が見える茶芸館があり、夏は結構人でいっぱいになるとのこと。夜、星や月を見ながらお茶を飲むなんて風流ですね。

心身共にお疲れの方チョット行ってみるといいと思いますよ。(へんみ・まさゆき 昭和五十三年商学部卒業)

美味しいパスタとコーヒーで、皆様のお越しをお待ちしております!

<プロント 越谷レイクタウン店>

〒343-0826 埼玉県越谷市東町4-21-1 イオンレイクタウンKAZE C201

TEL:048-934-3201 最寄り駅:越谷レイクタウン駅

営業時間:平日、土、日、祝日 カフェ 9:00~17:00 バー 17:00~23:00 定休日:無休

<プロント 大手町カンファレンスセンター店>

〒100-0004 東京都千代田区大手町1-3-2 大手町カンファレンスセンターB1F

TEL:03-6212-0036 最寄り駅:大手町駅

営業時間:平日 カフェ 7:00~17:00 バー 17:00~23:00 土カフェ 8:00~17:00 定休日:日祝

<プロント カレッタ汐留店>

〒105-0021 東京都港区東新橋1-8-2 カレッタ汐留B2F

TEL:03-5537-2344 最寄り駅:汐留駅、新橋駅

営業時間:平日 カフェ 7:00~17:30 バー 17:30~23:00 土 カフェ 10:00~17:30

バー 17:30~22:00 日、祝日 カフェ 10:00~18:00 定休日:不定休

PRONTO
CAFFÈ & BAR 1988

我が人生は早稲田と共に

越谷 重友



当稲門会には、八年前に元幹事長の小野間氏のお誘いで入会させて頂いた。現在は、居住地の西東京稲門会の方でも、常任幹事として参加させて頂いている。ビール会社勤務時代を経て現在は、公益財団法人組織に属し、経営コンサルタントとして、企業再生の仕事に携わっている。台湾との仕事上の拘わりはないが、台湾と我が国とは、歴史的にも係わりの深い隣国であり、二〇年前に初めて観光で台湾を訪れた好印象が心に深く刻まれ、その後も度々観光と歴史探究を兼ねて出掛けている。国家レベルはもとより、校友会に於いてもグローバルな連携・協調が必要な時代となっている。とりわけ、オープンマインドの稲門会員同士ともなれば溶け込むのも早く、何ら不安はない間柄である。また暫くは現役を続けなければならぬ身であるが、日台稲門会行事には極力参加させて頂き、両国校友との親交を深めたいと願っている。若い会

員から先輩会員に至るまでが心を一つにして肩を組む、「都の西北」の大合唱がでる感動は、高齢の仲間入りをした今日でも、稲門会を通して親しくなった友人・知己との交流は、いわば「宝」であり、生き甲斐となっている。

先人達の熱い想いを忘れず、これからも、日台稲門会員の友情を深め、些かでも母校の応援団として活動して参りたい。早稲田の良き伝統を守り、人間力・大学力の底力を持って「日台稲門会は永遠に不滅である」ことを念じている。(こしたに・しげとも||昭和三十七年第一法学部卒業)

旅と台湾

高 寛

“旅と旅行、その言葉の響きから何となくニュアンスが異なる感じがするのです。旅行とは日程を立てて行うもの。旅とは帰ることを前提とせず、自然のまま行動することのような気がします。帰ることが前提となっていない“旅人”は自然体で無重力であるが故に、旅先の人々にとつて旅人は異邦人としてではなく自然に心を開いて受け入れてくれるのではないのでしょうか？旅人にとつても旅人に優しく感じられる国とそうでない国があります。日本の旅人が台湾を旅すると幼かった頃の昭和の匂いを懐かしく感じてしまうのは何故でしょうか？その感覚とは、日本を良く理解している台湾

人と接するからというのではなく、昔の日本人そのもの、つまり我々の父母、またその祖先と時間軸を超えて話をしているのではないかと、いう奇妙な感覚にとらわれるのです。このような感覚になるのは、現在でも昔の日本の真心が脈々と引き継がれ、心に深く刻みつけられているからではないのでしょうか。一例ですが、台中にある宝覺寺(境内に台湾で亡くなった日本人の戦没者の慰霊碑がある)にふらりと訪問した際、慰霊碑に献花し手を合わせている台湾人老婆を見かけました。どうして献花をしているのかと尋ねると、老婆は、兄が日本の義務教育で学問を身につけたお陰で仕事につくことができ、小作貧農の私達家族は餓死せずになりました。無垢な気持ちで台湾を建国してくれた日本は我々家族の命の恩人であり深く感謝の気持ちを含めて献花しているのです」と話してくれました。決して裕福そうでない老婆は毎日、花屋に行って売れ残った花を貰い献花しているのだと聞いた時、熱いものがこみ上げて来たことを思い出します。旅の心をもった旅人を優しく感じさせてくれる国、信頼関係で結び付いた国、台湾は小生にとつて心の故郷です。

「国といふ、くにかがみとなるばかりみがけますらを 大和だましい」

詠み人知らず

以上

(たか・ゆたかり会友)

鈴木歯科クリニック Suzuki Dental Clinic

東京都豊島区池袋4-25-1 絃亜ビル1F 〒171-0014

Phone 03-5950-8241 Fax 03-5950-8242

歯科医師/歯学博士 鈴木 章 敬 Akiyoshi Suzuki,D,D,S.,Ph.d.

タバコ 肥満は歯周病リスクを高めます

適切な口腔ケア(歯ブラシ・舌ブラシなど)で歯周病は予防できます! 更に、カゼ、インフルエンザの予防になります!

よく噛んで! 歯周病予防と肥満予防!

口腔ケアで高齢要介護者の誤嚥性肺炎を予防しましょう!

日台友愛会の会員として、

台湾への思い

藤原 慶子

振り返れば、楽しい駐在生活でした。二度に渡る七年ほどの期間を、夫の建設プロジェクトの仕事に伴いました。アメリカに続く駐在ではありませんが、何もかもが新しい経験で、言葉も次第に理解できるようになったこともあり、外に出て普通の人たちとの御近所付き合いも始まり、楽しいスタートとなりました。しかしながら、付き合いが深くなるにつれ、日本と台湾とは、日台関係の実情の認識の違いにビックリ致しました。

日本の戦後史教育に異議あり！というのが実感です。教師たちも正しい戦後史を勉強して来ておらず、更に受験に向かっている詰め込み式勉強法でしか合格できない入試制度にも問題があつて、戦後の日本教育システムにまで問題が及びます。日本の若者の多くは何も知らないまま大人になっていくのでしようから。

日本は戦略的にも、台湾とはもつと友好関係を結んでいく必要があります。経済戦争も戦争ですが、ミサイルが飛んでくる戦争の方が恐ろしいに決まっています。水も食料も十分でない時、人は穏やかではいられません。さてさて、こういう時にこそ真面目に真剣に近隣の国との関係を見直さねばならないわけですが、日本政府の対応が真におかしい。言葉に発してコミュニケーションをとらなければ、腹の探り合いだけでは、外交は成り立たないのです。そういう時、唯一、

台湾は「あ・うんの呼吸」が通じる兄弟のような国であると、確信するのは私だけでしょうか？つれづれ思うことは、遠くの親せきより近くの他人です。今は国交がないということ、民間の個人的なつながりで、やっと台湾との友好関係は出来ておりますが、歴史に学び先輩日本人が出来たことの何分の一かを、少なくともわれわれ駐在経験者が、何か出来ることをしていくということに意義を見出せたらと思っております。(ふじわら・けいこ(会友))

台湾大好き！

久しぶりに第二の故郷、台湾に行ってきました。見慣れた景色、そして匂い。定宿のホテルマンがお帰りなさいと迎えてくれて、三年前にスツカリ後戻り。ああ、やっぱり台湾大好き。まるで惚れた男の胸の中という気分、この旅は始まりました。

今回の第一の目的であります平均年齢七六・六歳の友愛会の月例会に出席して、皆様の健康を祝福し、生憎とくなくなった三名のかたのご冥福も祈りながら懐かしい面々の手を握ったり、抱き合ったりの再会をしてまいりました。友愛会の彼らは日本統治時代、蒋介石時代、李登輝時代と生き抜いてきた方々で、日本語がとてもお上手で、若い頃には日本の大学に留学なさっていたり、台湾人でありながら日本兵として日本のために戦ってきたという経験者の

集まりです。会に出席するといつも知らなかったことを教えてもらえます。歴史的にそれほど有名でない日本人が、台湾の飲み水確保のために本当に良くやってくれましたとお礼を言われました。そういう人がいたなんて全然知りませんでした。ただ私が日本人だということだけで感謝されたりしますと、なんだか気恥かしさを感じますが・・・次に第二の目的ということ、少しばかりのビジネスのお手伝いをするために、日本の大きなS商社に出かけに行きました。その会社は世界中に支店を持つ大会社ですが、稲門会の会長の口利きということ、こんな私と若者二名に対して、VIP扱いで相談に応じて頂け、M.R.K.に感謝しないではいられません。M.R.K.はかつてこの会社の社長をしていたというところらしいのですが、台湾人は恩を忘れない人達なのでしょう。大成功でした！さてさて、台湾のフルーツと中華料理は本当に美味しい！食材と作り手と食べている環境のせいなのか、中華料理(台湾料理)というものは、本場だからでしょうか、何故日本で食べるのと台湾で食べるのとこんなに違うのかしら？というくらいに美味しいです。それに比べて、NYで食べる寿司は、場所によっては日本の食材に負けないくらい種類もあって美味しかったりするけれど、日本で台湾料理の美味しい店があったかしら？なんて思いながら、飲むは、食べるはで三日で二キロ体重が増えました。そして帰る頃滞在五泊六日が過ぎて日本に向かう飛行機の中では、ちょっと動くのにも、わが身の重さで息絶え絶えでありました。

会告

本年の台湾校友会(正式名称 日本早稲田大学台湾校友会)定期総会は十一月二十四日(土)、台中で開催される予定です。是非参加下さい。

※昨年のパンフレット



日本早稲田大学

台湾校友会
2011年度大会パンフレット

facebook



Name: thanksTaiwan
Status: <http://sankei.jp.msn.com/smp/wor>
Fans: 62

ドリアンケイコ(こと 藤原慶子)

これはきっと血管のどこかが詰まってしまったに違いないと思えるほど、いつも饒舌な(?)私が、会話の最中にふと頭を出て来ませんでした。今回の旅でなんと十三回も中華料理を食へてしまったのです、この一年ほど中華料理はNOサンキユウです。

平成二十四年 新春講演会実施報告

日時：平成二十四年二月四日(土)
場所：二十二号館二階二〇一教室



今年の新春講演会は、台湾通の片倉佳史氏を講師にお招きし、「台湾の現況と日台の絆」をテーマにご講演頂きました(早稲田大学台湾研究所・協賛)。会場には片倉氏のフログでの呼び掛けもあり台湾人聴衆も含め百五十人以上が詰めかけ、台湾への熱い関心が感じられました。片倉氏は平成八年から約十五年間台湾に在住、観光ガイドブックを多く手がけるのみならず、台

湾に関することなら歴史・地理・鉄道・グルメ・原住民の文化などジャンルを問わず観察を続けられ、多くの著作を発表されています。

前半は先月行われた台湾総統選、立法委員選挙を、後半は二百億円に上る義捐金の背景について、それぞれ現地からの視点で、真摯な中にもユーモアも交え雄弁かつ丁寧に語られ、講演予定時間を大幅に超過するほど盛り上がりました。

以下は講演のポイントです。

今回の総統選挙は、投票日直前の調査でも僅差の状況で進行し、開票結果発表まで勝敗が分かりませんでした。また、台北市では熱い選挙から静かな選挙へという印象で、熾もあまり見られない選挙戦でした。今回の投票率は78.8%と前二回に比べ低い結果となりました。一月十四日の投票日が二十三日の旧正月直前にあたり、二度も帰郷できないため棄権した有権者が多かったのではと思われれます。

馬英九候補は中南部、蔡英文候補は台東、花蓮と、普段票を取れないところでの選挙活動を重視して戦いました。

二〇〇八年に三十万人であった中国から台湾への旅行者は、馬政権の対中融和政策により二〇一一年には百七十七万人にも増えていきます。中国からの観光客は既に日本人観光客を超えており、観光地も中国人なしでは考えられなくなっています。レストランの味も台湾風から中国風に変化するなどの弊害も出ていと言われている

す。

南部では高雄のみ投票率が高かったのですが、これは、昨年一年間の中国からの観光客が大幅に増加したことが背景にあると言われています。つまり、二〇〇八年、高雄市長が独断でグライ・ラマを招聘しましたが、中国は報復として高雄への観光客を止め、高雄のホテルはキャンセルが相次ぎ大損害を蒙りました。中国からの観光客が増えることにより、利益をあげた人が多くいたことが、高雄のみ投票率が高く、国民党が勝利した一つの背景でした。

民進黨は女性が候補になったことで、イメージカラーを緑からピンクへと変え、独立色を薄めました。対中政策や台中の未来像が不明であったこと、そして地盤と言えない地域の投票率を上げることができなかったことが敗北の一つの原因になりました。

元々民進黨のキャッチフレーズの「加油台湾」は、今回に限っては国民党にお株を奪われた格好です。

国民党は日台関係の再構築にも熱心でした。台中問題は中国にとり建前上国内問題ですが、台湾が日本と組めば国際問題となります。例えば、台湾企業が中国に単独で進出した場合は国内企業としての扱いになりコントロールされますが、日本企業と組めば外国企業としての扱いになる。この流れで、日台合作ビジネスを盛んに推進しているのが国民党です。

馬英九総統は、自らを「友日派」と称しています。日台投資協定やオープンスカイ

協定などをまとめたのは確かです。富山、鹿児島、釧路にチャーター便が飛び、行き来が盛んになりました。又、八田興一記念館を国費で開設、その前の道路を八田路とするなど、これまでは民進黨中心の日台関係でしたが、馬政権はそれを換骨奪胎しました。

李登輝時代の日台関係は、「心と心」の関係でしたが、今、その老人たちの多くが亡くなり、国民党のコントロール下で新しい「国と国」との日台ビジネスの時代になっています。日本を重視することが、台湾の国際化にも繋がると言います。日台間の文化・経済・社会の強い結び付きは新しい時代を迎えてあります。

先の東日本大地震では、約二百億円の義援金が台湾から日本に送られました。人口二千三百万人あまりの台湾を考えるとその額は、日本に寄せられる親近感という言葉以上のものがあります。

一九九九年台湾中部大地震の際の日本の対応への「恩返し」であると答える人々もいます。一部マスコミがあたかも日本壊滅を思わせる報道をしたこともありましたが、台湾人、外省人を問わず日本への親近感、友情の表れであり、主体性に基づく行動だったと思います。

台湾人から受ける親切と、日本人が与える親切には差があります。台湾の人たちの相互扶助の精神は、相手の立場を考えないくらい？ 一方的な親切心にあります。その「心」と「絆」は強く共感を覚えるものだと思います。(採録：萩原 伸一)

馮寄台・駐日台湾代表が退任

後任に沈斯淳氏

次期駐日経済文化代表處代表に沈斯淳・外交部常務次長が就任されることになりました。馮寄台代表は依願退職の予定。但し、今後馬英九政権の要職に就かれる噂も出ています。

沈斯淳氏は台湾大学政治学部卒。一九七九年に外交部入りし、駐バンクーバー弁事処長(総領事)、駐カナダ副代表や国際組織局局長、駐チエコ代表、外交部主任秘書などを歴任。常務次長就任後はアジア太平洋地域を担当。松山・羽田間の直行便就航や二国間投資協定にあたる日台民間投資取り決め締結などの対日業務に携わられました。五八歳。家族は夫と一男一女。台南出身。英語畑ですが、独学で日本語を勉強。「今月三〇日の台北駐日経済文化代表処代表着任に向けて、スマートフォンで日本の新聞を読むなど、常に勉強しています」とのこと。言葉通り特訓を積み、先月下旬、外交部で就任に向けた宣誓式に臨んだ際、楊進添外交部長(外相)から「すでに中級レベル」とお墨付きをもらった由。緊密な日台関係の深化が期待されます。

次期垂東関係協会会長に廖了以氏

垂東関係協会の彭榮次会長が退任され、後任に廖了以・中国国民党前秘書長が就任されることになりました。

廖氏は台中市の逢甲大学統計学部卒。台中県の豊原市長や、台中県長、内政部国民党秘書長を勤められました。

父の廖忠雄氏は早稲田大学政治経済学部卒で元豊原市長。祖父の廖西東氏も日本統治時代の豊原街長(町長)。また、母方の祖父で、戦前に台中庁長を務めた佐藤謙太郎氏は、地元の代表的建築物として有名な台中公園内の湖心亭の設計者としても知られています。兄の廖一久氏は水産養殖で国際的に有名な研究者。

交流協会理事長、台北事務所長が交代

理事長は畑中敦氏から今井正氏へ交代。今井正氏は、一九六九年に外務省に入省し、アジア局北東アジア課長、国際情報局長、イスラエル大使、マレーシア大使などを歴任した。二〇〇七年九月より沖繩担当大使に就任し、二〇〇九年六月に外務省を退職。二〇一〇年一月四日より台北事務所長を務めました。

台北事務所長は今井正氏から樽井澄夫氏へ交代。

樽井澄夫氏(六四歳、外務省参与)は長年にわたる外交官経験を有し、その間外務省中国課長、在北京大使館公使、軍縮会議大使、沖繩担当大使等を歴任し、日台関係、兩岸関係に精通。

(平成二十四年四月二十四日付)

台湾校友会で役員改選があり、ご案内を頂きましたので紹介します。

謹啓 春暖の候 ますます、清栄のごとお慶び申し上げます。

平素は本校校友会の活動に格別のご支援とご厚誼を賜り、厚く御礼申し上げます。さてこのたび、前役員任期満了に伴い、左記のとおり今年三月十二日付にて新役員が正式に就任致しました。

私どもの新理監事会は、早稲田大学ならびに各稲門会との交流を深め、文化学術活動への取り組みを努む所存でございますので、前任同様のご指導、鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

まずは略儀ながら書中をもって就任のご挨拶を申し上げます。

敬具

二零壹貳年三月

日本早稲田大学台湾校友会

記

名誉会長	董炯熙	理事	蔡啓清
最高顧問	謝雨強	理事	李哲郎
会長	陳光敏	理事	王英夫
常任理事	方仁惠	理事	余溪水
常任理事	鄭文哲	理事	陳彥勳
常任理事	劉清標	理事	吳昕昌
常任理事	林滄智	常任監事	蔡榮郎
理事	黃一桂	監事	陳錫湖
理事	蘇銘峯	監事	陳石明
理事	陳昭明	監事	鄭又璋
理事	涂世俊	監事	駱慧娟
理事	張慧莉		
理事	林本章		

事務局 幹事長:林本章 担当:林明蓉
住所:台湾台北市錦州街28号10階
電話:(02) 25636622
FAX:(02) 25625828

母校記事 二〇一二年度稲門祭

二〇一二年度稲門会実行委員長 野崎 敬二

稲門祭は、毎年秋に開催される。校友の、校友による、校友のための「同窓会」と同時に、ひとりでも多くの学生を支援し、学業に打ち込んでいただける環境を提供するための集いでもあります。今年は、稲門祭全体のテーマを「復興支援」とし、「この手で開く、明日への扉」のキャッチフレーズの下、震災復興に真っ向から取り組んだ企画構成で、少しでも復興のエネルギーとなればと考えています。

毎年、期間・数量限定で販売される「稲門祭奨学金記念品」は、その収益がすべて「稲門祭奨学金」として学生諸君の支援に回されます。昨年は〇名への支援を果たすことができました。今年はさらに...との思いです。

一〇月二十一日の日曜日、秋のひと日を早稲田の杜に集いましょう。校友のみならず、晴れて卒業の新校友、そして学生のみならずも。早稲田ファンのみならず、近隣にお住まいのみならずも。懐かしい雰囲気を楽しみ、大いに交歓し、そのエネルギーを、学生の支援という形に変えて、震災復興に向けて少しでも有意義なイベントにしていきたいです。

http://www.waseda.jp/alumni/tomonsai/ (稲門祭ホームページより転載)

「セデック・バレ」
 (賽德克・巴萊 Seediq Bale)

昨春秋、台湾で公開された話題作。台湾映画史上最高額の七億NT\$の製作費をかけ、その結果四時間二〇分の大作になってしまったため、上下二部に分けて上映したという、台湾でも希な方法を採ったことでも話題を呼んだ作品。日本の統治後既に三十五年を経ていた昭和五年に起きた、台湾中部の山岳原住民・セデック族による抗日暴動事件「霧社事件」を題材にしている。

第一部『太陽旗』では日清戦争勝利の結果清国から割譲された日本による台湾統治の始まり及びセデック族との軋轢、そして蜂起までの経緯が淡々と描写され、第二部『彩虹橋』では日本軍による本格的討伐により、セデック族は悲劇的な最期を選択する、というストーリー展開。日本側が記録した歴史的事実を基にして、事件を忠実に再現していると感ずる。監督は「海角七号」で知られる魏徳聖。

首狩りや虐殺・戦闘のシーンは、ジョン・ウー(呉宇森)が参加しているからサム・ペキンパーばりの極めてリアルな映像で、モニタージュとGCを駆使し壮絶、胸に迫るものがあった。

原住民出身の俳優たちの演技は説得力があり、特に主役のモーナ・ルーダオを演じる大慶(青年期)と林慶台(中年期)は堂々とした演技で迫力がある。また日本の俳優陣も作品に溶け込んで役を演じており好感が持てた。

この作品を観ると、まず抗日事件を題材としているので反日映画という印象を覚えるが、そのうち一寸違つという気がして来る。崇拜する神や生きる意味、文化の違いによる文明の衝突、民族の誇りを取り戻すための戦い、など様々な思いが頭をよぎるが未だに整理がつかない。少なくとも「抗日戦士」をプロパガンダとしているわけではない、と感ずる。

また台湾山地のあの湿り気、台湾映画特有のあの湿度は心地よい。(文責・齋藤)



「父の初七日」(父後七日)
 Seven Days in Heaven)

台湾の古いしきたりに則った葬儀を通じて、肉親との絆を描いた作品。時には笑いもあり、また涙もあり、全体的には非常に淡々と進行する。何回参列してもよく分からなかった台湾の葬儀が多少なりとも理解できたような気がして、個人的には興味深かった。

彰化県(台湾中部)のある街に住む父(太保)の突然の死で、この話は始まる。訃報を受け取った娘のアメイ(王莉)は職場のある台北から帰省し、亡父と夜店を営む兄のタージ(陳家祥)や大学生の従弟シャオチュアン(陳泰樺)とともに葬儀の準備を始める。道士でもある叔父のアイー(吳朋奉)が伝統的な道教式の葬儀を取り仕切ることになり、野辺の送りの七日後まで繰り返されるエピソードに、日本人にとっては興味深いプロセスを垣間見ることができた。

まず、葬儀の日取りは古老たちの意見を参考に占いで決められてゆく。通夜・告別式のように単純ではない。そもそも叔父のアイーは、道士を勤めるものの本職は別にあるらしい不思議な人物だが、人生の達人の趣。また、葬儀の業者は叔父の彼女だが、これがまたよく働く。泣き女かと思えば供養のための楽隊の指揮も執るし(まるでお祭り騒ぎ)、勿論葬儀の進行も務める。

遺族は決められた時間に、棺桶に取り縋って泣かなければならない、それも派

手に。食事をしてようが関係ない。これを合理的でないと見ることができないのは、日本でも同じ。

父の恋人らしき女性看護師が吊問に現れるシーンは、入院中だったはずなのに、お父さんもやるね、と微笑ましいが、遺族は複雑。父の思い出がたびたびオーバーラップし、そうこうしているうちに七日目、別れの日がやってくる。

葬儀が終って空港で見せるアメイの涙煙草で蘇る父との絆。誰にも来ることではあるが、寂しい限りです。

(監督・王育麟、劉梓潔 2009)



馮寄台・駐日代表が
早稲田大学で講演

馮寄台前代表が退任前の五月十六日、早稲田大学国際教養学部で招き、講演と学生との対話を行いました。

講演は、先ず中華民国の歩んだ独立性を強調することから始まり、馬英九政権によって兩岸経済関係が確立され、さらに、それにより国際社会との交流が活発になったことなどを説明しました。

また、日台交流についても、代表処札幌分処の開設、東京羽田と台北松山空港を結ぶ直行便の就航、日台ワーキングホリデービザ発給制度の施行、台北文化センターの開設、故宮博物院文物の日本展示に必要な法律整備への働きかけ、在日台湾人の「外国人在留カード」国籍欄が「中国」から「台湾」に変更される、等々の成果を披露、さらに経済面では、「日台投資協定」、「日台航空自由化協定」の締結、「日台特許審査覚書」、「マネーロンダリング防止協定」の調印など、日台間の全面的な協力促進を強調しました。

昨年の東日本大震災に関しては、台湾民間からの義援金の紹介に続き、「日本人は、強く逞しい民族。日本が直ぐに立ち直れると確信している」と日本を励まされました。

今年一月に実施された総統選挙については、多く大陸ネット市民がこれに注目し、自国と比較することによって、「なぜ自分たちの国ではこれらを実現できないのか、自問することだろう」と述べました。影響が待たれます(文責・齋藤)

萬國專利商標事務所

当所は1972年に創立以来、企業団体、大学の学生団体に知的財産権についての指導を続けると共に、特許・実用新案・意匠・商標出願依頼人に対して、電子、電気、半導体、ビジネスモデル、ソフトウェア、化学、医薬品、バイオ、材料、機械、日用品等の各分野における発明・考案・意匠・商標の権利化を始め、知的財産関係の研究、相談など質の高いサービスを提供しております。皆様方の暖かいご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

所長 陳昭誠 (弁理士・会計士)
副所長 洪武雄 (弁理士・技術士)
副所長 陳昭明 (2001年アジア研)

台湾台北市 10044 博愛路 35 号 9 階
TEL: 886-2-2381-7099 (代表)
FAX: 886-2-2331-7068・886-2-2389-1188
E-MAIL: info@iprlouis.com
WEBSITE: www.louisipo.com

- メンバー：台湾弁理士会 (Taiwan Patent Attorney Association, TPA)
- 日本知的財産協会 (Japan Intellectual Property Association, JIPA)
- アジア弁理士協会 (Asian Patent Attorney Association, APAA)
- 国際商標協会 (International Trademark Association, INTA)
- 国際工業所有権保護協会 (International Association for the Protection of Industrial Property, AIPPI)
- 世界知的財産代理人連盟 (International Federation of Intellectual Property Attorneys, FICPI)
- 知的財産戦略ネットワーク (Intellectual Property Strategy Network, IPSN)

『萬國』は台湾登録商標

編集後記

今回は多数の会員・会友その他多くの方々にご協力頂き、二〇頁の会報ができました。当会を支える日台友好の活力を感じます。

最近の日台関係で特筆すべきは、今年赤坂御苑で開かれた園遊会に、宮内庁からの正式な招待により馮寄台代表夫妻が出席され、天皇・皇后両陛下から「台湾は東日本大震災で日本に大きな援助をしてください、感謝しています」というお言葉を贈られた、ということでしょう。また春の叙勲では台湾から一気に四人受章。これらは、東日本大震災に多大な支援をしていただいた台湾に対し、過剰な呪縛、気兼ねから何もする気のないどころか失礼な態度を続けた現政権が、国民の象徴である(海外は元首の位置付け、だからどうしても会いたがる)天皇・皇后両陛下に丸投げしたということ。まあ、現首相ではインパクトがありません。

また、鳥山頭ダムを建設した八田與一の功績を紹介する「八田與一展」を開催するなど、代表処からの働きかけも積極的です。八田與一は台湾の小学校教科書でも紹介されているとのこと、日本より有名です。

一部のマスコミには、日台友好を推進する方々を右翼と呼ぶ向きがあると聞いておりますが、親台湾派は今やマジヨリテイ(謝台湾)。マスコミもそろそろ公平な報道を行うべきではないでしょうか。(齋藤 晃)

WASEDA U 2012

祝・日台稲門会会報第15号発行

<p>早稲田大学校友会 日台稲門会幹事 北川原宣夫 E-mail: kitagawarajp@yhb.ne.jp</p>	<p>日台稲門会幹事 神田正治 E-mail: kanda0386@star.ocn.ne.jp</p>	<p>株式会社大和総研 総務部次長 川村淳一 〒158-8505 東京都江東区冬木一五六一 電話03(45-9220)500003 E-mail:junichi.kawamura@dir.co.jp</p>	<p>小野間恒夫 神奈川県茅ヶ崎市南湖五一五五 電話・FAX0467(883)2611</p>	<p>早稲田大学オープン教育センター講師 早稲田大学台湾研究所客員研究員 岩永康久 〒120-0345 東京都新宿区早稲田鶴巻町五三一 早稲田大学研究開発センター2F5号館5号室 電話03(5222)6106(内線)20010</p>
<p>日台稲門会幹事 高橋徹 E-mail: torutaka20@hotmail.com</p>	<p>アジアンブリッジ株式会社 代表取締役社長 阪根嘉苗 〒141-0021 東京都品川区上大崎 11-10-114-4908 E-mail:sakane@asian-bridge.com</p>	<p>日台稲門会・稲門乗馬会 齋藤晃 東京都新宿区新宿六六一二五十五 E-mail:akira_sji@hotmail.com</p>	<p>輿石邦豊 〒152-0002 東京都目黒区 目黒本町二一九一七 電話・FAX03(3710)1669 携帯080(11367)44457 E-mail:kn.koshishi@wing.ocn.ne.jp</p>	<p>日台稲門会幹事 北村友雄 〒231-0023 横浜市中区山下町九八番地 GSハイム山下町 516 電話045(688)7606 E-mail:kamuratomo@comhome.ne.jp</p>
<p>真鍋藤正 事務所 高座日台交流の会副会長 日台稲門会 監査役 真鍋藤正 神奈川県大和市中央五十二二五 電話046(2264)3050</p>	<p>日台稲門会 橋本紀明 〒279-0042 千葉県浦安市東野5-7-22 電話047(3881)5817 E-mail: hashimotosumit@gmail.com</p>	<p>日台稲門会幹事 萩原伸一 E-mail: shin_hagiwara50@yahoo.co.jp</p>	<p>日台稲門会幹事 中島淳 税理士事務所 中島淳 渋谷区代々木2-2-45 カテリーナ代々木201 E-mail:taxnakajima@gmail.com</p>	<p>フランスス・インター・リミテッド 陳惠珍 〒154-0013 東京都中野区弥生町 二一三十一十八 蒼苑ビル http://www.msfrances.com E-mail:chen@msfrances.com</p>
<p>早稲田大学台湾研究所 〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町五三一 早稲田大学研究開発センター201号館01号室 電話03(5222)2062(内線)0010 FAX03(5222)0000 E-mail:xxchian@waseda.jp</p>	<p>日台稲門会幹事 渡邊義典 〒204-0021 東京都清瀬市 元町二二六―二五 E-mail: watanabe.yoshinori3@nbr.nifty.com</p>	<p>早稲田大学校友会 日台稲門会 渡邊光治 千葉県市川市福栄四一七七 電話047(396)2196</p>	<p>華隆機器工廠有限公司 董事長 廖朝欽 廠址 台中市豐原市圓環北路二段三五九號 電話04(5222)30005</p>	<p>社会福祉法人 丸紅基金 事務局 局長 三村達 〒100-8888 東京都千代田区大手町 一丁目四番二号 丸紅ビル十二階 電話03(3288)7591 http://marubeni.or.jp</p>